『語学教育研究論叢』第 33 号

万里集九の荘子受容

呉　春燕

Banrisyuku's Reception of Zhuangzi

WU Chunyan

内容提要

作为五山文学后期的代表作家，万里集九熟读庄子，作品中留下诸多庄子烙印。由于受禅林所处社会环境及禅林文学创作风气等因素的影响，尽管其作品中也不乏对庄子思想的共鸣之处，但与五山文学前期禅僧相比，其庄子接受呈现出庄子出典的使用过于随意频繁、诗文内容流于世俗的倾向。

はじめに

万里集九（1428- ？）、法諱は集九、万里はその道号で、『荘子・逍遥遊』の「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九万里」から採っているという。五山文学後期（応仁の乱から室町時代末期）の代表的な学僧である。生涯を通じて、詩 1541、文 111 篇の夥しい文学作品を残し、『梅花無尽蔵』という詩文集を編纂し、自分の漢詩文をすべてその中に収めた。また、『東坡詩集』全 25 巻、黄庭堅の詩 20 巻、『三体詩』の講義を行い、その後、講案をまとめ、それぞれ『天下白』、『帳中香』、『暁風集』と号して、書に編纂した[1)]。

五山禅僧は老荘学を研究し、作詩が必須の学芸として課せられていたため、老荘的色彩を色濃く帯びた作品が数多く残っている。五山禅僧の詩文集を検討すれば、多くの漢詩文が老荘的表現に彩られていることがわかる。

「五山文学史の立場から見れば、万里集九の文学作品は質的には前・中期の名高い文筆僧と比較にならないが、五山文学の後期文壇に於いては、万里は該博広汎な学識を以て、最も多作な第一流の存在であった」[2)]と芳賀幸四郎氏が指摘した如く、万里集九及びその『梅花無尽蔵』には五山後期の文壇及び文学創作の様相が投影しているのである。それ故、『梅花無尽蔵』に収めた漢詩文を精査しながら、万里集九がいかに『荘子』を詩文に織り込んでいるか、いかに『荘子』を理解しているかを探ることにする。それによって、五山文学後期の荘子受容の一端を窺い知ろうとする。

一、万里集九と『荘子鬳齋口義』

室町時代の老荘研究については、江戸初期の林羅山が次のように指摘している。

> 本朝古来、読老荘列者、老則用河上公、荘則用郭象、列則用張湛。而未嘗有及希逸者。近代、南禅寺沙門岩惟肖嘗聞荘子於耕雲老人明魏、而後、惟肖始読荘子希逸口義、而来、比比皆然……[3)]
>
> （本朝古来、老・荘・列を読む者、老は則ち河上公を用い、荘は則ち郭象を用い、列は則ち張湛を用ふ。而るに未だ嘗つて希逸口義に及ぶ者有らず。近代、南禅寺沙門の岩惟肖嘗ちて荘子を耕雲老人明魏に聞く、而る後、惟肖始めて荘子希逸口義を読む、而来、比比皆然り……）

即ち、日本では古来、『老子』については河上公注が、『荘子』については郭象注が用いられていたが、五山南禅寺の僧侶惟肖得厳に至って、始めて林希逸口義が用いられるようになると言っているのである。

万里集九と荘子のかかわりについては、『蔭凉軒日録』によれば、文明十八年（1446）六月、栖芳軒月翁周鏡を講師として荘子講が催され、亀泉集証・万里集九・横川景三・桃源瑞仙・春陽景杲・景徐周麟らがこれを聴講したことが知られる。

惟肖得厳は五山中期の代表的な学僧であり、万里集九の時代より半世紀以上もの前の禅僧であることを考慮に入れれば、万里集九の荘子研究は林希逸の『荘子鬳齋口義』をもとにすると推定しても大過はなかろう。

また、『梅花無尽蔵』第一の文明十年の部に、「奉答大昌、天隠和尚来書」

と題する詩があり、それに附した序文が第六の冒頭に出ている。その中には

書尾及虞齋所注之件々。伊陽有雍伯容者。嚢底秘一華老人南華之蝶翼、翁一覧之、則可矣。

（書尾に虞齋の注する所の件々に及ぶ。伊陽に雍伯容なる者有り。嚢底に一華老人の南華の蝶翼を秘す。翁、之を一覧せば則ち可なり。）

とあり、題目の下に書中、「以荘子十余件之不審見投。答一華所編李逸註抄。今在伊陽。（書中に荘子の十余件の不審を以て投ぜらる。一華の編する所の李逸の注抄を答ふ。今、伊陽に在り。）」という注が付いている。

つまり、文明十年（1478）、建仁寺内の大昌院に住している天隠竜沢から万里集九宛てに書簡を送り、その中に荘子に関する質疑十余件を問いただしている。上記の詩と詩序は万里集九が天隠竜沢に応答したものである。万里集九は序文において、天隠の荘子についての疑問には直接答えず、今、伊勢にいる雍伯容という人の所に、一華老人の編する李逸註抄があり、それをご覧になればいいと返信した。

ここでいう「李逸註抄」は、李が季の書写の誤りで、しかも季が希と音通で無意識のうちに用いられ、南宋の林希逸著の『荘子虞齋口義』の註抄であると推定されている。万里集九のいう一華老人はいうまでもなく、かつてその会下で『荘子』の薫陶を受けた一華建怠のことである。

万里集九は天隠龍沢の荘子についての疑問に答えなかったが、このことにより、当時の禅林では、万里集九が『荘子』に関して造詣の深い人だと考えられ、また、『荘子虞齋口義』に基づいて『荘子』を研究していると判定できよう。

二、荘子に対する理解

周知の如く、荘子は姓荘名周で、その著書は『荘子』である。道教では始祖の一人だと認められ、「南華真人」と称されているため、著書の『荘子』が『南華真経』とも呼ばれている。また、『史記・荘周伝』には「周嘗為漆園吏（荘周嘗て漆園の吏を為す）」とあるので、荘子のことが「漆園吏」とも称されている。

万里集九の詩文には荘子本人のことにも幾たびも触れているが、「荘周」、

「南華」、「南華丈人」と、著書の『荘子』を「漆園篇」や「南華経」と称している。

『梅花無尽蔵』七の「文麗号説」には次の一文がある。

至戦国、南華之胡蝶、展紅翎於虚無自然之花間。寓言巵言、筆端之鼓舞、能避秦燔之猛烈。

（戦国に至って、南華の胡蝶は、紅翎を虚無自然の花間に展べ、寓言巵言、筆端の鼓舞は、能く避秦燔の猛烈を避く。）

つまり、戦国時代になると、荘子が現れ、荘子はその書の中で「胡蝶の夢」の寓言を述べ、虚無自然な説を展開した。その巧みな寓言や、とりとめない広大な論をその筆先に勢いよく述べ、秦の猛烈な焚書坑儒の害を避けたのである。

胡蝶といえばすぐ荘子を連想するほど、「胡蝶の夢」は『荘子』において最も知られている故事典故であるといえよう。万里集九はこの文でわざわざ荘子本人のことを「南華の胡蝶」になぞらえた。荘子は有無・是非の相対の世界を超越した境地で有りのままで生きていこうと主張しているが、万里はその思想主張を「虚無自然」という言葉で的確に概括した。また、「寓言巵言」は言うまでもなく万里が『荘子』雑篇の「寓言」における「寓言十九、重言十七、巵言日出、和以天倪」という一文を踏まえたもので、「筆端之鼓舞」は明らかに『荘子』に対する好評であろう。

この文により、万里集九は荘子の「虚無自然」という思想主張にも『荘子』の「寓言巵言」という表現手段にも的確な理解を持っていることが窺い知れよう。

万里集九は祖元上人が枕流亭の偈を求めたのに答えるため、「祖元上人需枕流亭之一偈」を製した。

鴉鳴鵲噪事如雲、塞断耳根曾不聴。枕是尋常枕非枕、南華路自浪痕分。

（鴉が鳴く、鵲が騒ぐなどの事々も雲の如し、耳根を塞ぎ断てば曾ち聴かず、枕は是尋常なれども枕は枕に非ず、南華の路が自ら浪痕分る。）

詩の中で、万里集九は世俗の騒がしいことが雲のように多く、耳を塞ぎ断ち切っていれば、それを聞かずにすむ、上人が用いる枕は、普通には見えるが、普通の枕ではない、上人が荘子のように、是非・真偽などの分別にとら

われず一切の執着を捨てて、まるで波の消えた跡のように生きていると祖元上人のことを讃えているが、それから万里の荘子理解もはっきりと読み取れよう。

また、万里集九は『梅花無尽蔵』二の「夏四月初八、始聴子規」には次のように詠んでいる。

雨餘新緑暗於煙、武野四年初聴鵑。堪笑街談付烏有、世皆内外漆園篇。

（雨餘の新緑、煙よりも暗し、武野四年、初めて鵑を聴く、笑うに堪へたり、街談が烏有に付される、世は皆内外ともに漆園の篇なり。）

転・結句の大意は荘子の書のいうように、世の中で有と無は一体で、すべては「無し」と決めつけられるものだと万里は感嘆している。

以上述べてきたように、万里集九は荘子の「虚無自然」、「万物斉同」などの思想主張に共感を持っており、『荘子』に関する造詣もかなり深いのである。

三、よく用いられる『荘子』故事典故

荘子本人及び著書の『荘子』に対する言及のみならず、万里集九の詩文には『荘子』の故事典故も数多く見られるのである。

『梅花無尽蔵』に見る『荘子』故事典故の一覧表

	詩文の題目	『荘子』故事典故	出　典
一	緑蝶	遽然未脱是非絲	斉物論
一	立春前、一日寓興	乱里艱難涸轍魚	外物
一	書灯	分與児童読五車	天下
一	題便面唐先生詩瓢	獨有先生担至楽	至楽
二	梅賛二首	錬成姑射花	逍遥遊
二	趙更敏、春山図	大鵬九萬撃天関	逍遥遊
二	便面	此中定有驪龍臥	列御寇
二	長享丁未小春二十又二日	触蛮無地不紛争	則陽
三・上	便面	日々花前胡蝶飛	斉物論
三・上	廿八日…戯作詩云	好在忘心無一点	譲王
三・上	九日、二祖断臂	螳螂左臂雖無力	人間世
三・上	作三詩奉光徳翁	可付蝸牛左角間	則陽
三・上	謹奉攀春翁夢之佳作	白髪應成入花蝶	斉物論

三・上	猫児双蝶図	蝶衣薄裏誰春夢	斉物論
三・上	讀漢書未至江左間	蝸牛左角易黄昏	則陽
三・上	為朝巨箭図	但雖斥鷃不大鵬之境界	逍遥遊
三・下	元宵口号	盖因国有蝸角之巷説	則陽
三・下	持是院屏風十二首	収入荘周斉物談	斉物論
三・下	便面二首	夢里荘周蝶白衣	斉物論
三・下	梁之仏心天子、作一句	寔螳臂支雷車者乎	斉物論
三・下	屏風賛九首	荘乎花暖雖迷蝶 恵也□萍未識魚 一場春夢五車書	斉物論 秋水 天下
三・下	屏風賛四首	螳螂幸有英雄志 揚左臂宜支日車	人間世 徐無鬼
三・下	画軸	春夢飛花覚又荘 魚々至楽付濠梁	斉物論 至楽秋水
三・下	春雨菴、桃源和尚	而目無全牛	養生主
四	太平雀	今朝九万試鵬程	逍遥遊
四	讀伝灯録	坡仙万里駕南鵬	逍遥遊
四	相陽之佐藤長和	天令万物賦其形	知北遊
四	洞宗之廣澤上人	上人雖具運斤之妙	徐無鬼
四	達磨賛	一葦涙江胡蝶夢	斉物論
四	天寧和尚辞悦岩居士忌齋、	春衣紅蝶忽醒来	斉物論
四	穆公上人、酒三河人也	芥舟也芥舟	逍遥遊
五	漫次韻梅叔信公蔵主初雪	物我難忘蝶纏夢	斉物論
五	衆善蒲菴禅師、避兵	猶使触蛮知着鞭	則陽
五	画軸五首	錬成姑射花	逍遥遊
五	瑞龍悟溪和尚、降臨持是院第	蝶夢路應通	斉物論
六	簑懶斎詩序	無何之花 無陥是非栄辱之筌蹄 天地一指、万物一馬 南面王之富貴也	逍遥遊 外物 斉物論 至楽
六	雪江斎詩序	有蝸角之紛争	則陽
六	鷗臥斎画軸詩	逍遥自得	讓王
六	蓬莱左股図詩並序	天匠運斤斧削圭角	徐無鬼
六	山水画軸序	余己坐忘	大宗師
六	画軸序	而南華之丈人、是謂秋水	秋水
六	代人、雞旦賀疏	張雲門楽於洞庭野	天運
六	画山水巻軸	雖然大鵬之威、斥鷃増焉	逍遥遊

六	答等持桃源禅師書	吁不肖死灰槁木	斉物論
六	樵斎記	嘗窃笑以為隋侯之珠弾雀	譲王
六	花菴序	其至楽超南面王	至楽
七	笑岳説	其各忘形而笑	譲王
七	文麗号説	南華之胡蝶 寓言、巵言、筆端之鼓舞	斉物論 寓言
七	小蓬莱府中…疏並序	螳螂之臂纏有揚	人間世

この一覧表によると、『梅花無尽蔵』の 46 部もの詩文作品には『荘子』の故事典故が 58 回も用いられている。その出典が『荘子』内・外・雑合計 33 篇の中の 16 篇に分布しており、そのうち、「斉物論」が 15 回で、最も引用されている。それは、「斉物論」の故事典故はほとんど「万物斉一」の理を説き明かすもので、禅僧たちにとって詩文創作のよい材料のためだと考えられよう。ほかには、「逍遥遊」が 10 回、「則陽」が 6 回、「至楽」と「人間世」がそれぞれ 4 回、「譲王」、「秋水」と「徐無鬼」がそれぞれ 3 回、「外物」と「天下」がそれぞれ 2 回、「列御寇」、「寓言」、「天運」、「大宗師」、「知北遊」、と「養生主」がそれぞれ 1 回引用されている。また、それらの故事典故の具体的分布及び頻度数は次のようにまとめられる。

『荘子』故事典故の具体的分布及び使用頻度数の一覧表

斉物論	逍遥遊	則陽	至楽
胡蝶の夢 (11) 是非 (1) 斉物 (1) 死灰槁木 (1) 天地一指、 万物一馬 (1)	鵬、逍遥 (5) 姑射 (2) 無可有 (1) 芥舟 (1)	蝸角触蛮 (6)	至楽 (3) 南面王 (2)
人間世	**譲王**	**秋水**	**外物**
螳螂 (4)	隋侯之珠 (1) 忘形 (1) 忘心 (1)	濠梁 (2) 秋水 (1)	筌蹄 (1) 涸轍鮒魚 (1)
徐無鬼	**天下**	**列御寇**	**寓言**
運斤 (2) 日車 (1)	五車 (2)	驪龍 (1)	寓言巵言 (1)
天運	**大宗師**	**知北遊**	**養生主**
洞庭之野 (1)	坐忘 (1)	天地之委形也(1)	目無全牛 (1)

「胡蝶の夢を題材にした禅僧の詩は枚挙にいとまがない。胡蝶といえばすぐ荘子を連想するのが、彼らの社会のならいであった」[4]と芳賀幸四郎氏が指摘しているように、「胡蝶の夢」も万里集九の詩文に最も頻繁に登場しているのである。その次は「蝸角触蛮」と「鵬、逍遥」が挙げられるが、それは万里集九が当時の「応仁の乱」に触発された慨嘆、荘子の描いた何もかもにとらわれない自由自在の心境への憧れによってではなかろうかと思われる。

四、禅的場面における荘子受容

禅宗は迦葉に祖述し、仏教に属する一流派であるが、仏教哲学と中国の土着思想、特に儒道思想と習合した産物であり、儒家の人倫観念・入世精神と老荘の自然主義・平等思想及び自由観念の浸透があればこそ、中国化した仏教宗派である禅宗の誕生があったのである[5]と李霞氏が指摘しているように、禅僧は常に儒道の思想や故事典故などを援用して禅宗の教理や禅意を闡明する。五山禅僧も例外ではなく、禅的場面において荘子に関する事項をしばしば引用していた。

⑴　「胡蝶の夢」

既述したように、「胡蝶の夢」は『荘子』「斉物論」に出ている故事であり、趣旨が万事万物の差別を無くし、「彼我同化」の境地を作り出すところにある。その奥深い哲理が禅家にとって、執着心を棄て、悟りの道を開く比喩として最適の話頭であるので、五山禅僧に親しまれている。上記の如く、万里集九の「胡蝶の夢」を踏まえた詩文が 11 部もあり、中の多くは「禅」と関連付けて詠出されたものである。

万里集九は「緑蝶」と題する詩には次のように詠じている。

> 短翎何幸約宮衣、定有遊蜂次第欺。紅女房西秋入夢、遽然未脱是非糸。
> （短翎が何とぞ幸ひに宮衣を約せん。定めて遊蜂が次第に欺く有らん。紅女の房西も秋、夢に入る。遽然となれば、未だ是非の糸より脱せざらん）

「短翎」は蝶のことであり、「遽然」は「胡蝶の夢」という故事中の「俄然

覚、則遽遽然周也」という句に由来している。詩の転・結句は作者が夢の中で蝶になったが、ふと目が覚めて、はっきりと人間の姿に戻ってみると、まだまだ荘子の「斉物論」のように、万物が一体であるというような、物事の是非・善悪にとらわれない、所謂絶対的な悟りの境地に至らないと意味の詩である。万里集九はこの詩で荘子の「胡蝶の夢」という典故を引用して、自分が禅僧として執着心を棄てられず、悟りの境地にどうしても至れないことに嘆いているであろう。

また、『梅花無尽蔵』第三上に、「便面」という詩がある。

日々花前胡蝶飛、定応残夢裏春衣。南楼鐘声莫吹送、耳尚易醒心易違。

（日々に花前に胡蝶飛ぶ。定めて応に残夢も春衣に裏まるべし。南楼の鐘声、咲き送る莫かれ。耳は尚、醒め易く、心は違ひ易し。）

ひらひらと飛んでいる蝶が、必ず荘子の夢の中の蝶だ、鐘にどうか音をここまで吹き送らないでほしい、鐘の音で夢から目が覚めやすく、目覚めると、現実が夢と全く異なるようになってしまうと吟じて、その蝶にいつまでも夢の中で自由に飛んでほしいと願っているという。詩は扇面に付した賛詩であるが、扇面の蝶を見て、万里が思わず荘子の「胡蝶の夢」に連想し、蝶のように自由自在な世界で飛翔しよう、現実社会の一切是非・矛盾から離脱しようと願がっているようである。

「達磨賛」という詩に、万里集九は次のように詠んでいる。

一葦涙江胡蝶夢、九年面壁野狐禅。嗣香一辨被相誑、断臂無端就雪擎。

（一葦、江に涙す、胡蝶の夢、九年面壁す、野狐の精。嗣香を一たび辨ずるに相誑かさる。断臂、端無くも雪に就いて擎く。）

詩は禅宗初祖の達磨に賛じたものであるが、前半は達磨の故事を、後半は「慧可断臂」の故事を詠じている。達磨が芦を舟として江を渡り、少林寺で九年間も壁に向かって座禅し、悟りに到達した、のちの二祖神光は仏道を求める熱意が強く、ついには思いがけなくも、自ら自分の臂を断ち切って、雪降る中に、達磨の前に捧げ、達磨もこれを許したのであったという。詩は達磨や禅僧二祖慧可の悟りを開く経緯を語っている禅的なものであるにもかかわらず、万里集九はわざわざこのような場面で荘子の「胡蝶の夢」の故事典故を引用して、人生のはかなさに慨嘆している。

⑵ 「鵬」

「鵬」は現実には存在しない鳥であるが、『荘子』「逍遥遊」の「鯤鵬」という寓話に登場してから、後世の人はよく「大鵬」、「鵬程」などの「鵬」に関する言葉により、人や物事の勢いの大きさを描写する。万里集九も自分の漢詩文でよくこの典故を用いる。

『梅花無尽蔵』第四の「読傳燈録」には、万里集九は蘇東坡のことを「鵬」と関連づけて論じている。

坡仙万里駕南鵬、忽入曹渓剪暗燈。字々分明着眼処、荼毘景徳一孤僧。

（坡仙が万里まで南鵬に駕し、忽ちに曹渓に入って、暗燈を剪る。字々分明なり、眼を着くる処、荼毘にす、景徳の一孤僧。）

蘇東坡は、荘子の所謂「鵬」に乗って、万里も遠い南溟に飛び立つように、遠く海南に流されたが、途中、広東省の曹渓に泊まり、伝灯録を詠んでいたが、灯心のもえかすが書物の上に落ち、一人の僧の名が焼け、その坊さんを荼毘にしてしまったという。詩は東坡が禅宗祖師の法脈や法語を記す『伝灯録』を読む故事を踏まえたものであるが、東坡のことを坡仙と称しており、東坡が海南に流されることを荘子の「鵬」に乗って行くと比喩している。

『梅花無尽蔵』第五の「太平雀」という詩に、万里は次のように詠んでいる。

嘴短三年不得鳴、今朝九万試鵬程。此声一々非凡鳥、天上亦驚天下驚。

（嘴短くして、三年、鳴くを得ず、今朝、九万、鵬程を試む。此の声、一々、凡鳥に非ず、天上も亦驚き、天下も驚く。）

詩は万里集九が始めて禅林の詩会に入った時の作品であるの詩において、万里は自分のことを未熟な雀に譬え、今まで三年間も鳴かず、詩の発表もしなかったが、今日という日は、荘子のいう大鵬が九万里も高く飛び上り、翼を広げて飛び出したように、この晴の舞台で詩作を試みようと自信満々で語っている。また、この場における一人一人の作品は皆凡人の作ではなく、天上でも天下でも皆驚くような傑作であろうと誇張な口調で列席の禅僧らの作品を称賛している。

⑶ その他

万理集九は「九日、二祖断臂」という詩に「螳臂当車」の典故を踏まえ、

次のように詠んでいる。

風雪紛々埋洛陽、早梅先自少林香。螳螂左臂雖無力、弛得九年弓一張。

（風雪、紛々として洛陽を埋む。早梅は先ず、少林より香る。螳螂の左臂、力無と雖も、弛み得たり、九年、弓一張。）

禅宗二祖の慧可が左臂を切るという説話を詠う詩作であるが、激しい吹雪は洛陽の都を埋め尽くした、少林の山から早咲きの梅の香が伝わってきている。慧可が自ら断ち切ったその左腕は荘子の所謂螳螂のように無力だが、師匠の達磨が九年間も石上に座り続けた、あたかも弓の一張りのような緊張した道心を緩めて、慧可の願いを受け入れさせることができたという。「螳臂当車」は『荘子』「人間世」に出てくる典故で、本来弱いものが自分の力を考えずに、強いものには立ち向かう譬えであり、後世の文学創作にはよく自分の力や才能にはっきりとした認識のない人を戒めるのに用いられているが、この詩作では万里集九はこの典故を借用して、慧可の求道の誠意と決心を表している。

五、種々の場面における荘子受容

禅的場面のみならず、五山禅僧は種々の場面において荘子関係の事項を詩文に詠み込み、荘子への共鳴を表したり、個人的心情あるいは世事・風物などを表現したり、さらに自己の博識を披露したりする。

⑴　画図賛詩

五山中期になると、各寺院に中国から伝わった書院や書斎を中心とする建築様式が移入され、必然的にそれらの装飾に必要な水墨画や障壁画の需要が高まった。さらに、画図には禅の宗旨が多分に含まれていることから、画図の上に禅僧の賛を求めることが始まり、画図を前に詩を読むことが急速に普及した。後期になると、扇面、画軸や屏風などにも賛詩を付することも風潮になっていた。万里集九の作品の多くはそのような場面で作り出されたのである。

『梅花無尽蔵』第三下の「畫軸」において、万里集九は次のように吟じている

春夢飛花覚又荘、魚々至楽付濠梁。浪不動如無水跡、隔□天涯結網郷。

（春夢に花に飛び、覚むれば、又荘なり。魚々の至楽は、濠梁に付す。浪動かずして、水跡無きがごとし、□を隔てて、天涯、網を結ぶの郷。）

つまり、はかない春の夢の中で、蝶となり、無邪気に花に群れ飛んだが、目が覚めると、荘周に戻った。魚たちはこの上ない楽しみはあの濠の川の水に任せよう。川の波は全く立たず、水の動く跡もないようだ。ここは漁師の村と全く離れた天涯の果てで、魚の楽天地であるという。

詩題が示した如く、この詩は画軸に付した賛詩である。起句の「春夢飛花覚又荘」という句はいうまでもなく「胡蝶の夢」を踏まえたものであり、承句の「魚々至楽付濠梁」は、明らかに『荘子』「秋水」の「濠梁之弁」という故事典故に基づいたものである。「濠梁之弁」とは、荘子は「物我融合」の心持で自然万物を観賞しているので、魚の楽しみを感じ取ったのに対して、恵子は理性的な態度で周りの物事を見ているため、魚の楽しみが全然感じられない、二人がそこで弁論を始めたという故事であり、荘子と恵子の数多くの問答の中では最もよく知られた話である。万里集九はこの詩の中では魚の至楽を認め、荘子への共感がはっきりと読み取れる。

『梅花無尽蔵』第三上の「為朝巨箭図」と第六の「畫山水巻軸、洛下諸老詩文之跋」には、それぞれ「但雖斥鷃不及大鵬之境界、所取其楽者一也（但、斥鷃は大鵬の境界ならずと雖も、其の楽しみを取る所の者は一なり）」と「諸老若見此卑詞、則必痛罵、雖然大鵬之威、斥鷃増焉（諸老、若し此の卑詞を見ば、則ち必ず痛罵せん。然りと雖も、大鵬の威は斥鷃、焉を増さん）」とある。文章は同時に「鵬」と「斥鷃」のことに触れており、明らかに『荘子』「逍遥遊」の「斥鷃が大鵬を笑う」という故事を踏まえたものである。斥鷃は雀のような小鳥で、飛翔の距離はすごく短い。見解に制限されているので、「鵬」のことがとても理解できない。そこで、「鵬」の飛翔の気勢を見ると、「彼且奚適也、我騰躍而上、不過数仞而下、翺翔蓬蒿之間、此亦飛之至也、而彼奚適也」と笑った。荘子は「鵬」と「斥鷃」の境界の差別に対して、「此小大之辯也」と評したのであるが、万里集九はこの故事に出ている「鵬」と「斥鷃」を文章に織り込んだ。前の文章には「鵬」と「斥鷃」が思想境界に異なっているにもかかわらず、飛翔から得た楽しみが同じであると指摘し、

この故事典故に対する万里なりの理解と活用が見られるが、後の文章には自分の詩作が先輩の目から見れば、必ず「斥鷃」のような卑俗なものに違いないと荘子への共鳴が感じられる。

また、万里集九の「胡蝶の夢」を引用する詩文では、扇面、画軸などの絵に賛じたものが何首かある。『梅花無尽蔵』第三上の「猫児双蝶図」には、「使牡丹無乱花後、母猫不睡午陰斜。蝶衣薄裏誰春夢、容易双飛莫触牙（牡丹をして乱後の花無からしむ。母猫は睡らず、午陰斜めなり。蝶衣の薄く裏むは、誰が春夢ぞ。容易くは双飛、牙に触るなかれ。）」とあり、『梅花無尽蔵』第三下の「便面二首」には、「夢里荘周蝶白衣、一邊何意背花飛。山茶雖美無香事、疑是海棠春睡微（夢里の荘周、蝶の白衣となる、一邊、何の意ありてか、花に背いて飛ぶ。山茶は美なりと雖も、香事無し、疑ふらくは、是れ、海棠、春の睡り微かなるを）」とある。いずれも、蝶の絵を見て、荘子、または荘子の「胡蝶の夢」という典故に連想して書いたものである。

⑵　戦乱への感懐

万里集九の時代は室町幕府の統治秩序が乱れ、「下剋上」の雰囲気が愈々強まり、動乱が相次ぐ時代であった。特に、応仁元年（1467）、所謂「応仁の乱」という大きな動乱が起き、京都も戦火の中、廃墟と化してしまった。万里集九は所居を失い、京を出て、近江にさまよい、美濃、尾張を四、五年間転々していた避難生活に強いられていた。確たる身の寄せ所もなく、文明四年（1472）ごろ、ついに還俗した。その後、ずっと、寺院に寄寓したり、友人の庇護を受けたりして、創作の活動を続けていたのである。このような時代に身を置いた万里集九はよく荘子の「蝸角」や「触蛮」で当時の戦争と動乱を慨嘆した。

「蝸角」も「触蛮」も『荘子』「則陽」に出ている故事で、荘子の作り話である。荘子は「道」の立場から見れば、当時の国と国との争いが蝸牛の角上で争っているのにすぎず、人々に視野を更に広め、些細なことにこだわらないように呼び掛けていた。荘子はこの故事において達観・超脱な人生態度で世界万物をみようという主張を示している。後世の人もこの説話に啓発され、よく世俗のつまらない矛盾や些細な紛争を「蝸牛角上の争い」に譬える。

万里集九は「読漢書未至江左間」と題して、次のように詠じている。

蝸牛左角易黄昏、遂欠二班書一言。乱後塵肥無寸草、春風猶未入暁痕。

（蝸牛の左角、黄昏なり易し、遂に二班の書の一言を欠く。乱後は塵肥え、寸草無し、春風猶、未だ暁痕に入らず。）

万里集九の自注によると、この詩は応仁の乱後、万里が江左に逃れた時の作である。詩の中で、万里は応仁の乱を蝸牛角上の争いと譬え、また、江左に避難しているので、「蝸牛左角」といい、自分の応仁の乱に対する不満を漏らした。詩の大意は、つまらない「応仁の乱」のため、今まで読み続けていた班彪・班固の漢書を、最後の一部分を読み残しているという。

『梅花無尽蔵』第三上の「作三詩奉光徳翁」には、万里集九は次のように詠んでいる。

千坂両書寧等閑、慙吾催促愈無顔。勝非勝又負非負、可付蝸牛左角間。

（千坂の両書、寧ぞ等閑ならんや、慙づ吾催促し、愈顔なきを。勝は勝に非ず、又、負は負に非ず、蝸牛の左角の間に付すべし。）

関東の両上杉氏の戦争に関する詩である。その戦いに対して、万里集九は勝負が無意味であり、戦争そのものもつまらなく、全く蝸牛の角上の争いのようなものだと考えている。

『梅花無尽蔵』第六に、「雪江斎詩序」という文章があり、その中には「於時相武之両使君、有蝸角之紛争、豺狼當道（時に相武の両使君、蝸角の紛争有り、豺狼、道に当る。）」とある。万里集九は当時の相模と武蔵との戦を「蝸角之紛争」に譬え、兵士を恐ろしい豺狼に譬え、戦争への憎みを流した。

『梅花無尽蔵』第五に、「衆善蒲庵禅師避兵」という詩がある。万里はこの詩において、「伝聞滕薛共争長、猶使触蛮知着鞭（伝へ聞く、滕薛共に長を争ふと、猶、触と蛮とをして、着鞭を知らしめん）」と吟じ、春秋時代の滕侯と薛侯と席の上下を争うことがつまらないことだと述べ、滕侯と薛侯を「蝸牛角上の争い」の触氏と蛮氏に譬えている。

⑶　その他

多くの場面において、万里集九は荘子に関する事項を想起し、自分の詩文に詠み込もうとするようである。

人に号を求められるに際して、万里集九は『荘子』「逍遥遊」に出てくる「芥舟」を思い出し、次のように詠んでいる。

芥舟也芥舟、且未識来由。細可問荘周、荘周横点頭。忘機者白鴎、采杜若芳洲。

（芥舟や、芥舟や、且、未だ来由を識しらず。細やかに荘周に問ふべし。荘周、横に点頭せん。機を忘れる者は白鴎にして、杜若を芳洲にとる。）

つまり、「芥舟」の号をつけようとするが、その由来を荘周に尋ねるとよい、そうすれば、荘周はうなずいてくれる。この俗世の欲念を忘れているのは、あの白い鷗であり、鷗は世を離れ、あの芳草のかおる水中の州でやぶしょうがをとるのであるという。

まとめ

以上、万里集九の詩文集の中に荘子に関する事項がどのように詠出されているか見てきた。おおよそ下記の特徴が見られた。

① 荘子の「虚無自然」、「万物斉同」などの思想主張に共感を持っている。

② 『荘子』の故事典故がたくさん用いられる。そのうち、「胡蝶の夢」、「蝸角触蛮」や「鵬・逍遥」などが頻出する。

③ 禅的場面における荘子受容が見られるが、禅宗旨を闡明する詩文がほとんどなく、禅宗諸祖のことを詠嘆したり、禅林の文学活動を詠ったりするものが多い。

④ 種々の場面において荘子関連の事項が詠出されるが、牽強付会で、さらに自分の博学を披露するための作品も見られる。

万里集九はなぜそのような荘子受容が形成したのであろうか。それは万里集九の時代、及び中世禅林後期における文学観や禅僧の世俗化に原因があると考えられる。

前に述べたように、万里集九の時代は「応仁の乱」の前後で、戦乱が相次いだ時代であった。このような時代に身を置いた、『荘子』の愛読者である万里集九は「蝸角触蛮」や「胡蝶の夢」などの故事典故を用い、当時の動乱、人生のはかなさや無常などを慨嘆するのは容易に想像できよう。

また、太田亨氏が指摘しているように、禅林後期の禅僧は「参禅学道」より詩文の創作に執心しており、その作品も禅宗旨の色合いがきわめて希薄になり、純文学の色合いがいよいよ濃くなっていた。作品の題材は更に豊富になったが、内容的には世俗化の傾向をたどっていた[6)]。それは万里集九の荘子受容にも顕著に表れている。詩文で荘子の故事典故を多用することにより、万里集九は『荘子』にかなり詳しく、荘子の思想主張もよく理解していることがわかるが、作品の多くは心からの感銘によるものではなく、「詩会」という公的な場で人と唱和したり、畫軸や屏風などの絵に賛したりしたものであるため、禅林前期の禅僧と比べ、万里集九の荘子受容は皮相浅薄な様相を露呈しており、そこから創作の技法や自分の博学を衒う傾向も容易に見られるといえよう。芳賀幸四郎氏のご指摘如く、それはまさに詩文の堕落、文学的価値の減退と呼ばれるものであった[7)]。

【注】

1）市木武雄　『梅花無尽蔵注釈 · 第一』　1993 年　続群書類従完成会　p.3
2）芳賀幸四郎　『中世禅林の学問及びそれに関する研究』　1981 年　思文閣　p.361
3）京都史蹟会編纂　『羅山先生文集』　1918 年　平
安考古学会　p.187
4）芳賀幸四郎　『中世禅林の学問及びそれに関する研究』　1981 年　思文閣　p.202
5）李霞　『道家と禅宗』　1996 年　安徽大学出版社　p.2
6）太田亨　「五山文学概説」（アジア遊学第 142 号）　2011 年　勉誠出版　p.117
7）芳賀幸四郎　「中世禅林における荘子研究―五山の学問と近世の学問との関係―」（『日本歴史』第 44 号）　1952 年　日本歴史学会　p.9

【参考文献】

市木武雄　『梅花無尽蔵注釈 · 第一』　1993 年　続群書類従完成会
芳賀幸四郎　『中世禅林の学問及び文学に関する研究』　1981 年　思文閣
李霞　『道家と禅宗』　1996 年　安徽大学出版社
高文漢　『中日古代文学比較研究』　1999 年　山東教育出版社
玉村竹二　『五山文学新集』　2003 年　思文閣
蔭木英雄　『五山詩史の研究』　1977 年　笠間書院
陳鼓応　『荘子今注今訳』　1983 年　中華書局